

からこかぎ

第24号 平成31年2月11日(月)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

東海バス旅行のご案内

バス旅行世話人グループ

1 東海の地形

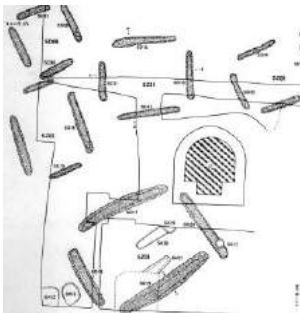
東海は、濃尾平野を中心に愛知県・三重県・岐阜県・静岡県を指しますが、今回は、伊勢湾東岸地域の濃尾平野の弥生遺跡をメインに、帰路には伊勢湾西岸の弥生遺跡(Dグループ)を訪れます。途中、貝殻山博物館、見晴台考古博物館、鈴鹿市博物館に立ち寄り、展示遺物を観るコースです。

濃尾平野は、木曾三川(木曾川・長良川・揖斐川)により形成され、河口部(南西部)で伊勢平野と連なっています。弥生期の微高地は、縄文海進後(約6000年前)の海退に伴ない木曾三川が運んできた堆積砂層の上部に形成された自然堤防と、旧河道と直交する浜堤(ひんてい)からなっています。浜堤は、奈良県ではみられないもので、波が海底の砂礫を打ち上げ、汀線に沿って高さ数m、幅100m程度の堤状の地形を形成したものです。(7ページ:「あゆち潟と弥生時代の海岸線」参照資料)

伊勢湾東岸地域の弥生遺跡の分布は、3つに分類できます。1つは、一宮市周辺の沖積砂層上の微高地のエリア(Aグループ)、1つは当時の海岸線に沿った浜堤エリア(Bグループ)、さらに1つは台地上のエリア(Cグループ)です。以下、訪問する遺跡の幾つかを紹介します。

2 山中遺跡と八王子遺跡(萩原遺跡群)…Aグループ

最初に訪れる遺跡は、弥生後期の標識遺跡として著名な山中遺跡です。遺跡は、縄文晩期から弥生期全般にかかる遺跡ですが、前期には、在地系ともいえる四隅に陸橋を有する方形周溝墓(左図:前期周溝墓配置図 ネット画像より。以下同じ)が築かれ、中期の遺構は不在ですが、後期には前方後方形を含む墳丘墓群が形成されています。



遺跡がある一宮市萩原町周辺は、犬山扇状地の端部付近にあり、全長3.4km・幅600mの範囲に弥生期の遺跡が集中し、特に後期になるとその南北に集落域が拡大します。

山中遺跡から北東1kmにある八王子遺跡の発掘調査の成果を根拠に、萩原遺跡群を「狗奴国」の所在地と考える意見もあります。八王子遺跡は、縄文晩期終末から弥生前期に集落活動が始まり、遺跡南側には幅300mの大きな河道(北東→南西)が流れ、その北側右岸に集落域が展開し、環濠、住居跡、方形周溝墓などが検出されています。注目されているのが、廻間1式期(庄内古段階の弥生終末期)に、二重の溝に囲繞された大規模な方形区画(南北80m東西40m 右図:遺構配置図)とその内部の大型掘立柱建物(1辺12m)です。そ



のそばには、大きな井泉（径5.5m深2.2m）が検出され、その周辺からはS字甕を含む大量の土器・木製品・銅鏃・玉類が出土しています。この空間は、古墳期に連なる重要な道具立てが揃い、儀式場（各部族長が集うイベント会場）とする意見もあります。ここからは、遠望となりますが、早くから縄文後晩期の濃厚な遺構・遺物で知られる**馬見塚遺跡**、最古級の前方後方形墳丘墓(左下写真)が検出された**西上免遺跡**さらには萩原遺跡群の各弥生遺跡などが確認できます。

3 元屋敷遺跡と伝法寺野田遺跡…Bグループ



次いで訪れる元屋敷遺跡は、前期の集落遺跡で東西120m南北100mの隅丸方形の環濠が検出され、南東側では3条掘削され、その内2条は外側に最掘削されています。戦国期に壊されたのか遺構は、堅穴住居(1)と土坑(2)のみです。環濠は中期には継続していません。遺跡の北東1.5kmには別項で紹介された



中期初頭の環濠集落の**猫島遺跡**(中期前葉の水田祉が検出されている。地形はAグループ)があり、東300mに伝法寺野田遺跡があるなど周囲には弥生前期から後期にかけて28もの遺跡が集中しています。**伝法寺野田遺跡**では、前期から中期の水田(604筆 右写真:水田祉全景図)

とそれに伴う畦畔142条、溝3条、土坑4基が検出されています。さらに、その下層からも水田遺構4筆、畦畔5条、溝2条がみつかっており水田稲作が定着した地域社会の様子がみてとれます。

4 朝日遺跡と廻間遺跡…Bグループ

朝日遺跡は、東西1.4km、南北0.8km、推定面積80万㎡の大規模集落遺跡で、弥生前期～古墳期初頭まで継続する複合遺跡です。遺跡は、浜堤列上に位置し、北東～南西に伸びる幅25～30m深さ4mの谷地形(埋



積浅谷)によって南北に分断された微高地上に集落(標高2～3m)が形成されています。前期は、貝殻山貝塚周辺に小規模の環濠が形成されますが、中期初頭には集落域を拡大し中期前葉から中葉に環濠を形成しています。環濠からは、カシの逆茂木とその外側に乱杭が検出され、弥生社会を牧歌的な農耕社会のイメージから「戦乱の時代」と塗り替えた学史的に重要な遺跡です。(左写真:左から土塁、環濠、柵逆茂木、乱杭と連なる)しかし、防御施設でなく洪水・水害対策とする意見が、近年有力となっています。遺跡からは、貝塚、堅穴住居、

井戸、方形周溝墓、水田遺構、玉や青銅器の工房など前期から終末期までの遺構が検出されています。また、パレススタイル土器や円窓付土器を含む大量の土器や石製品・骨角器・木製品さらに多様な金属器(有肩袋状鉄斧・刀子状鉄製品・銅鐸・巴形銅器・筒形銅製品・破鏡その他)が出土し貝殻山貝塚資料館に展示されています。

朝日遺跡の五条川を挟んで対岸に位置する**廻間遺跡**(標高1.5～1.7m)からは、旧河道に沿って住居群と近接して6基の墳丘墓が検出されています。その中に、前方後方形の墳丘墓が1基(左写真)検出されています。



時期は、弥生終末期の庄内古段階に相当する廻間I式期(150年前後)です。また、S字状口縁台付甕も多く出土しています。在地土器のS字甕は、東日本のみならず瀬戸内・北部九州と広範囲に分布し、東海文化の波及の指標となっています。

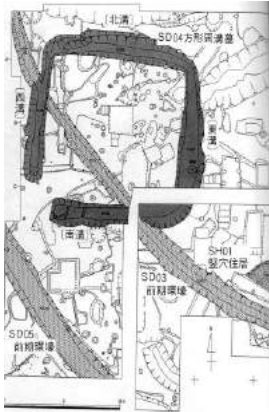
5 西志賀遺跡と月繩手遺跡…Bグループ

朝日遺跡から南東3kmにある**西志賀遺跡**は、昭和5年に弥生期の貝塚(下写真:貝層断面)が発見され、早くから注目されていた遺跡です。また、遠賀川式土器の東限として知られ、前期後半の西志賀式土器の標識遺跡となっています。近接する**西志賀公園遺跡**と**平手町遺跡**に連なる前期の環濠が見つかっています。一方、北3kmに前期の環濠集落の**月繩手遺跡**があります。弥生前期の集落は、奈良県と同様に近接した集落間の配置であったことが分かります。



6 高蔵遺跡と見晴台遺跡…Cグループ

西志賀遺跡から南西2kmには、**名古屋城三の丸遺跡**が市の中心部にあります。



遺跡からは、中期前半と後期前半そして弥生終末期の堅穴住居・土坑・墳丘墓が検出されています。市中心部から南東にかけて標高8~15mほどの平坦な熟田台地となり、そこに**高蔵遺跡**があります。遺跡(左図:前期環濠と中期周溝墓配置図)は、前期の環濠(4~5条)をもつ集落遺跡ですが、中期前葉は検出されていませんが、中期以降もV字断面の環濠は継続しています。遺跡から南東3kmの瑞穂台地(標高10~15m)に**瑞穂遺跡**があり、その南3kmの笠寺台地上に**見晴台遺跡**があります。いずれも後期を中心とする集落遺跡で、V字断面の環濠が形成されますが弥生期のうちに埋没しています。特に、見晴台遺跡は、環濠(南北180m東西170m 下:環濠断面写真)内に170棟の堅穴住居が検出されています。

見晴台考古資料館を訪れ、出土遺物を確認しますが、北東1.3kmにある後期のV字断面を有する後期の環濠集落の**三王山遺跡**も遠望できます。



8 上箕田遺跡と永井遺跡…Dグループ

伊勢湾西岸は、丘陵が南北に展開しその間をぬって主要河川が流下し、弥生遺跡を形成しています。北九州から始まる遠賀川系の土器の分布は、伊賀地域を経て中勢・北勢と北上し尾張・三河地域を東限としたと考えられています。時期的には弥生前期中段階で、松阪市中ノ庄遺跡(雲出川)・津市納所遺跡(安濃川流域)・鈴鹿市上箕田遺跡(鈴鹿川)・四日市市永井遺跡(三滝川)など河川に沿って集落遺跡があります。その中で、**上箕田(かみだ)遺跡**(標高5m)は、遺跡周辺では1.5~2mほどの浜堤が確認されています。第1次調査では、前期の溝・後期の杭列を伴う水路などが検出され、その後の調査では中期の方形周溝墓も検出され、前期から後期に継続する土器・石器・銅鐸形土製品や拳大の炭化米が多量に出土しています。上箕田遺跡は、特に前期の土器が多く出土していますが、周辺遺跡からは、中期前葉~中葉の遺物が多く出土しており、近距離にある扇状地端部に位置する**須賀遺跡**からは中期前葉の溝(環濠)が検出されています。



また、**永井遺跡**は、三滝川が形成した沖積地を望む台地南端部(標高20~30m)にある環濠集落で、前期新段階には弧状の溝が6条検出されています。周辺には、同じ時期の環濠集落の**大谷遺跡**などがあります。いずれの遺跡からも縄文晩期後半の土器が出土し、その時期には既に低地部に進出していたことが分かります。いずれの遺跡も前期中段階も縄文系の突帯文土器が伴っています。上写真は、その時期の永井遺跡出土の東日本系(大洞)土器です。伝来した弥生文化と旧来文化の継承により土器の多様性があらわれていて、伊勢湾東岸も同じと思います。

また、**永井遺跡**は、三滝川が形成した沖積地を望む台地南端部(標高20~30m)にある環濠集落で、前期新段階には弧状の溝が6条検出されています。周辺には、同じ時期の環濠集落の**大谷遺跡**などがあります。いずれの遺跡からも縄文晩期後半の土器が出土し、その時期には既に低地部に進出していたことが分かります。いずれの遺跡も前期中段階も縄文系の突帯文土器が伴っています。上写真は、その時期の永井遺跡出土の東日本系(大洞)土器です。伝来した弥生文化と旧来文化の継承により土器の多様性があらわれていて、伊勢湾東岸も同じと思います。

遺跡紹介 猫島遺跡

弥生ウォーク世話人グループ

1 はじめに

猫島（ねこじま）遺跡は、愛知県一宮市千秋町に所在し、名神高速道路下り線一ノ宮パーキングエリア建設に伴う事前調査（平成11・12年度）で発見された遺跡です。中期初頭から中葉段階の短期間の遺跡ですが、環濠、掘立柱建物・堅穴住居、初期水田、土壇墓・方形周溝墓など集落を構成する遺構が全て検出されていて、その時期の集落の景観が確認できる稀有な遺跡です。遺跡の南側に北東→南西の谷地形が広がりその谷の縁辺部から北側にのびる微高地上（標高7.5m）にあり、微高地は縄文海進（約6000年前）以降の海退に伴う旧木曾川が運んできた砂の堆積により形成されたものです。千秋町周辺（一宮市東部）は、市西部の萩原遺跡群（八王子遺跡・山中遺跡など）と並んで弥生期の遺跡が多く分布し、特に中期から後期の遺跡が集中しています。今回は、愛知県埋蔵文化財センターの発掘報告書を基に、出土遺物に着目し遺跡を紹介します。

2 環濠

遺跡周辺では、元屋敷遺跡（前期環濠集落）をはじめ北島白山遺跡・三ツ井遺跡・野辺遺跡などから弥生前期の遠賀川土器が出土していますが、猫島遺跡からは弥生前期の活動痕跡は確認されていません。



しかし、中期初頭には、最大径220m幅120mの楕円形の内環濠・外環濠の二重の環濠（左写真：二重環濠北より）が形成されます。環濠内の居住域は200m程と想定されています。前期の環濠は、遺跡から南西1.5kmにある元屋敷遺跡（東西120m南北100m）をはじめ朝日遺跡、西志賀・平手町遺跡、縄手遺跡、松河戸遺跡、八王子遺跡、高蔵遺跡などにみられ、朝日遺跡・八王子遺跡などは中期まで継続しています。遺跡では、中期前葉末に洪水により外環濠が埋没し、その後中期中葉初頭にいったん再掘削されますが、中期中葉には埋没し

ています。遺跡の最も東側の調査区から北西→南西方向の自然流路（幅6.5m深2.1m縄文晩期～弥生中期前葉）が検出され、環濠は北西側が深く、溝と溝の間に20cm程度の土塁状の堤（輪中）や柵列を置くなど洪水対策を強く意識したものとなっています。

環濠から出土した土器に着目し、中期段階の集落の景観を確認します。出土土器は、遠賀川系土器もみられますが、縄文晩期凸帯文の系譜の条痕文土器（貝殻や植物の茎で文様）や美濃・飛騨・信濃方面にみられる沈線文系土器が多く出土しています。これら縄文系土器が優越するのは、東海地域では弥生前期後葉から顕著といわれていますが、猫島遺跡でも同様の傾向を示しています。在地縄文系の人々の伝来した弥生文化の受容関係を示す資料といえます。なお、遺跡内からは、土製人面、土偶形容器、鼻状の隆起のある土製円盤やベンガラが残存した土偶など複数の土製品が出土していて縄文期の精神性が持続されていることも窺えます。

3 居住域

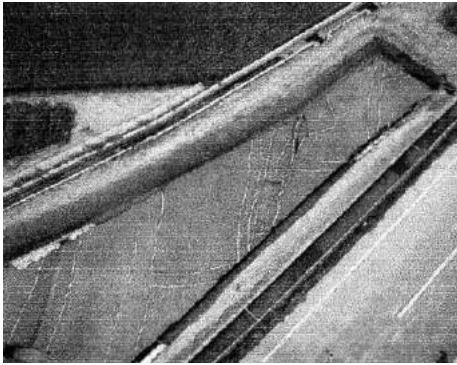
環濠内の居住域では、無数の大小のピット群が検出されています。堅穴住居は、中央部付近を中心に多く検出され、確認された堅穴住居は、30棟ほどですが、中期段階では珍しい松菊里型堅穴住居が6棟

検出されています。因みに、出土した炭化材(29点)と柱根(2点)の樹種は、ヒノキ科とムクノキ・クワ属など針葉樹、落葉・常緑広葉樹といった構成です。また、花粉分析では木製品の原料となるコナラ亜族が多く、アカガシ亜族などが報告され、でんぷん質を多く含むどんぐりなどが食料源となったものと思われます。遺跡内から磨石・敲石(162点)、石皿・台石(11点)などが多く出土して、縄文時代から継続する堅果類の採取を重視していたことが裏づけられます。

一方、住居付近の昆虫化石の分析結果は、食糞性昆虫などの都市型昆虫が多数検出されていて、人の集住性が裏付けられています。

4 生産域

(1) 稲作 遺跡の南側から中期中葉以前の畦畔状の遺構(左写真：水田社全景)が検出されています。10



区画程度の小規模の水田(25~45 m²)が検出され、区画の大きさは長辺5m以上・短辺3~4mです。付近からは炭化米も出土しています。また、先ほどの昆虫化石の分析結果では、水田指標昆虫である稲作害虫(一部畑作害虫を含む)が多く検出され、この時期には、既に水田生態系が近隣にあったことが裏付けられています。

遺跡からは、土中の保存状態が悪く、鍬・鋤などの木製品の出土は少ないのですが、特徴ある石器が出土しています。石包丁は3点ほどと少なく、ホルンフェルス・砂岩などの河原石を打ち剥がした粗製剥片石器が100点近く出土しています。その刃部には珪酸の光沢が残存する使用痕跡が確認されています。石包丁の斜行する線状痕跡と異なり、刃部の中央部では刃部と平行する線状痕がみられ、近畿地方の穂刈りと異なった稲株を切断する使用法(根刈り)を報告書では想定しています。遺跡から南南西1.4kmにある伝法寺野田遺跡からも中期を中心に前期からの水田社も検出され、この時期には、水田経営が定着していたことが確認できます。

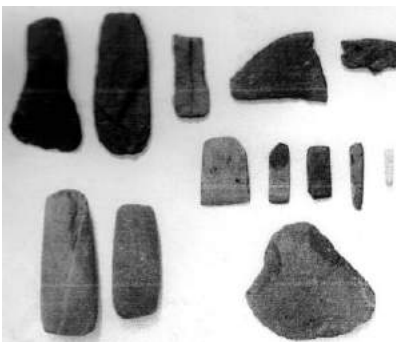
(2) 玉造り また、遺跡からは溶結凝灰岩の管玉が3点とその未成品や石鋸(施工具)、石錐(穿工具)、有溝・平滑砥石が出土し、朝日遺跡と同時期の中期初頭からの玉造りがなされていたことが分かっています。北陸や近江からの原材料の入手や技術の導入そして製品の流通など広範囲の交流が予測できます。

(3) 木製品

遺跡からは、伐採斧77点加工斧26点と多く出土し、畿内ではみられない緻密で重くねばりがあるハイアロクラスタイトという青川(鈴鹿山系)の河原で採取できる変成岩を使用した石材が使用されています。また、その石材が使い込まれているとの報告がなされており、先ほどの建築部材に見られる多様な樹種構成を踏まえると木製品の製作は活発だったと思われます。

(4) その他

遺跡からは、250点ほどの多くの石鏃が出土しており、狩猟・採取の生業の割合は高かったと推測でき



ます。(左写真：打製石斧・石包丁・磨製石斧・粗製剥片石器) 石鏃は、伊勢湾地域の特徴である先端部に段があり、身が五角形の有茎の長身石鏃も含まれています。石材は、近畿地方にみられない割れ口がガラス片のように鋭い下呂石の占める割合が高く、次いでチャートさらに少数ですがサヌカイトなどです。下呂石は、岐阜県湯ヶ峰に露頭があり、そこから飛騨川・木曾川ルート of 交流が想定されます。また、サヌカイトは、

古くから奈良県や瀬戸内との交流があったことが示しています。

5 墓域

集落の西端側と東側に墓域を形成し 15 基の方形周溝墓（中期中葉前半～中葉後半 左写真）が確認されています。土壇墓は西側墓域から 13 基確認されています。



注目したいのは、畿内と異なった在地の墓制です。周溝墓は、方形の周溝の四隅を掘り残す陸橋を持つ在地のタイプに属し、環濠の外でなく居住区に接して墓域を形成しています。土壇墓の木棺は、側板と小口板が斜めの槽形で、近畿地方の組合せの箱型木棺と異なっています。また、溝から出土する土器は壺形土器が多いのですが、主体部では逆に壺形土器よりも甕や深鉢形土器が多く出土し供献土器の構成も異なっています。

遺物紹介 巴形銅器

会報編集グループ

1 はじめに

今回は、ミュージアム第二室に展示されている巴形銅器（ともえがたどうき）を紹介합니다。弥生期の巴形銅器は、一般に南海産のスズ製を模したと思われる形で、大きさは 5、6cm 程度で半球状の座に湾曲した 6、7 本の支脚が付着しています。古墳期は、大阪府和泉市黄金塚古墳から楯に配された巴形銅器が出土したことより楯の飾り金具として使用されたとされていますが、弥生期は魔除け、まじないといった呪具と考えられています。



展示されている巴形銅器(左写真)は、唐古池整備事業に伴う第 23 次調査（1985 年 200 m²）で出土したものです。東側堤防を、延長 100m、幅 1.5～2m の範囲で調査がなされ、木棺墓 2 基（前期末。C14 データでは中期後葉）が検出され、布製品・銅鐸形土製品・搬入土器など多くの遺物が出土しています。南側の調査区は、80cm 程の堤防盛土に覆われ、その直下に中世末葉の素掘溝（幅 30～40cm 調査区全面）が

検出され、その下層には弥生中期中葉から古墳後期の遺物包含層があります。巴形銅器は、中世の素掘溝からの出土です。巴形銅器は、弥生時代後期から古墳時代中期にみられ、その殆どが北部九州を中心として出土し、発掘当時は畿内では弥生期の出土例はありませんでした。

2 巴形銅器

出土した小片は、残存長 2.7cm・幅 1.3cm・重量 6.1g で、巴形銅器の座と脚の付着部分の破片とされています。全体に鑄上がりが良いが、座の一部にヒビ割りがみられ、表面（座の内外縁部と脚の外縁・中央部分）には突線が鑄出されていると報告されています。弥生後期に北部九州に出現する巴形銅器は脚が左曲がり（6～7 本）からなり、古墳時代の右曲がりの 4 脚と型式が異なります。出土した小片は、推定復元され、半円球座で脚は左周りの 7 脚とされ、全長径は 10.3cm 復元高 1.9cm の大型品とされています。発掘報告書では、「残念ながら中世遺構からの出土で、



朝日遺跡 出土巴形銅器

本来の時期や遺構は不明である」としています。特に、小破片ですので、完形品が出土した愛知県朝日遺跡の出土例から弥生期の巴形銅器を確認します。

3 朝日遺跡の巴形銅器

朝日遺跡では、弥生後期になると金属製品（銅鐸・筒形銅製品・破鏡・銅鏡・銅鏃・袋状鉄斧など）が多く出土し、巴形銅器(前ページ写真)は、南居住区からの出土でした。全形は5.6cm・半円球座形3.0cm・高さ1.1cmの小型品で左曲がりの5脚が付着しています。内外に文様はありませんが、唐古・鍵遺跡の出土品と異なり、内側にベンガラが塗布され、表面は研磨され光沢を持っているとのこと。巴形銅器の最古資料とされる佐賀県桜馬場遺跡出土の巴形銅器と類似していると評価されています。しかし、注目したいのは、座の内側に棒状の鈕が見られる所です。北部九州の鈕は、「こぶ状」とされています。因みに、唐古・鍵遺跡の出土品は、残念ながら内面の鈕は確認されていません。

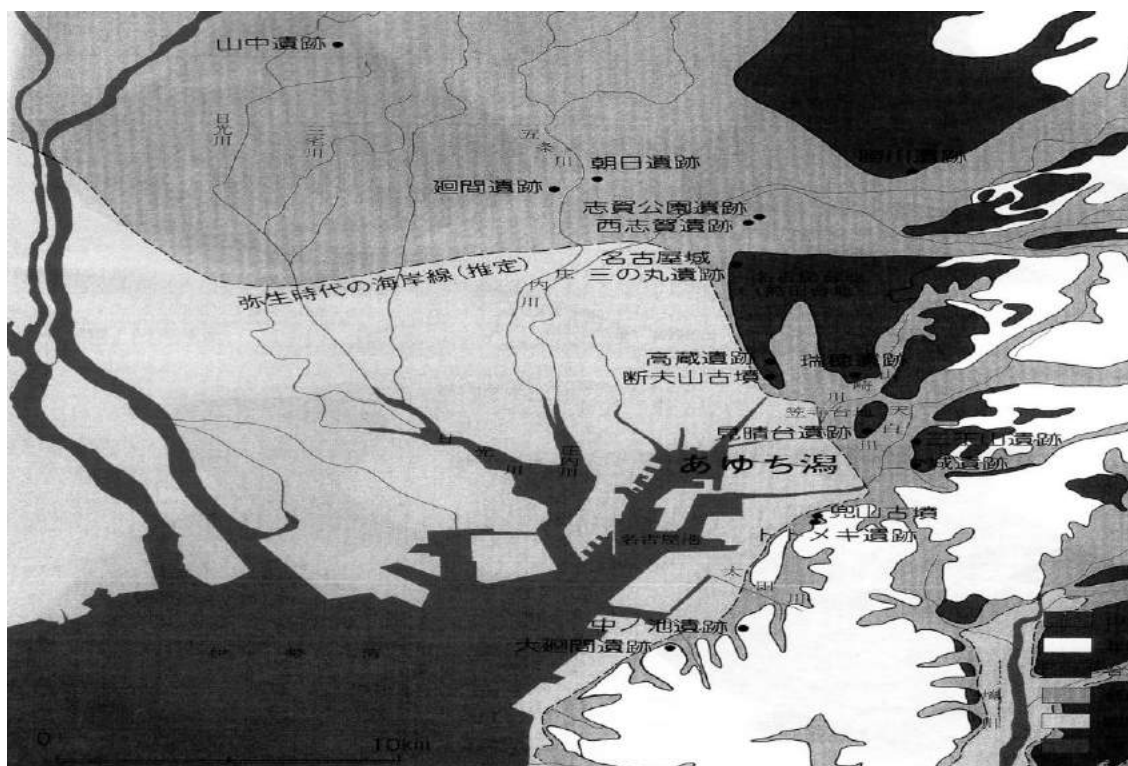
弥生期の巴形銅器の鋳型ですが、吉野ヶ里遺跡、那珂遺跡群、九州大学筑紫地区遺跡群など北部九州で出土例があります。朝日遺跡では、鋳型は出土していませんが、遺跡内で製作された可能性が高いと発掘報告書では推定しています。それは、北居住区や環濠付近で青銅製品が多く出土し、付近から銅滴、被熱した粘土塊、土製鋳型が出土することを根拠としています。なお、遺跡の南西端の貝殻山貝塚付近から、菱環鈕式銅鐸の石製鋳型が出土し、早い時期の青銅器製作が見込まれています。



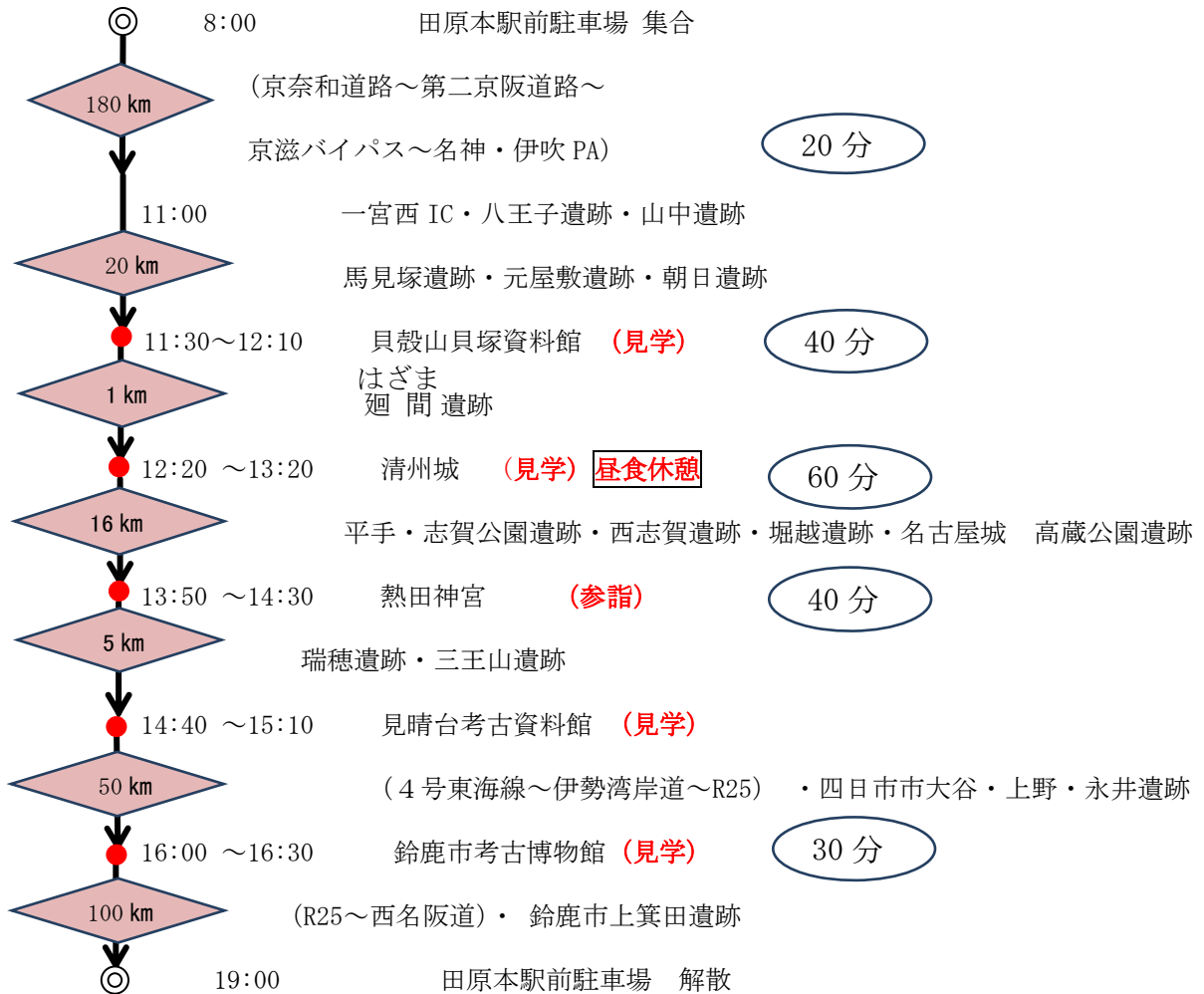
近年、朝日遺跡と類似した巴形銅器(左写真：裏面)が、弥生終末期の東海最大の弥生集落といわれる濃尾平野北西部に位置する大垣市荒尾南遺跡の大溝（幅約10m長さ450m以上）から出土しています。形状は、5脚の左曲がりの半球形座で棒状鈕を持つなど酷似した特徴をもち、内面にはベンガラが塗布されていました。

大阪湾以東の弥生期の巴形銅器は、大正5年に発見された長野県上田市上平遺跡をはじめ滋賀県虎姫町五村遺跡、茨城県石岡市宮平遺跡などから僅かですが出土事例があり、北部九州と異なった動向が気になります。荒尾南遺跡の巴形銅器は、弥生終末期の東海系文化の西方への伝播ルートを解明する出土品として注目されます。因みに、纏向遺跡からは庄内式土器とともに巴形石器が出土し、佐味田宝塚古墳や新山古墳などの古墳期の副葬品となる巴形銅器に連なるものとする意見があります。唐古・鍵遺跡の出土銅器片は、その意味でも重要な展示遺物といえます。

(参考：あゆち潟と弥生時代の海岸線)



行程表



訪問遺跡

(A地点)

一宮西インター→ 八王子遺跡(車窓)→ 西上面遺跡(遠望)→山中遺跡(車窓)

(B地点)

→ 馬見塚遺跡(遠望)→ 猫島遺跡(遠望)→元屋敷遺跡(車窓)→ 伝法寺野田遺跡(車窓)→朝日遺跡(車窓)→ 貝殻山資料館→ 清洲城(昼食)→ 廻間遺跡(遠望)→ 堀越町遺跡(車窓) → 平手町遺跡・志賀公園遺跡(車窓)→西志賀遺跡(車窓)→月繩手遺跡(遠望)

(C地点)

名古屋城三の丸遺跡(車窓)→ 高蔵遺跡(車窓)→ 熱田神宮→ 瑞穂遺跡(遠望)→ 見晴台遺跡→ 見晴台考古資料館→ 三王山遺跡(遠望)

(D地点)

大谷遺跡・ 上野遺跡・ 永井遺跡(遠望)→ 鈴鹿市考古資料館→ 上箕田遺跡・ 須賀遺跡(車窓)

(編集委員) 東 治雄 井上知章 植田洋高 谷口敬子 福島道昭 藤原隆雄 万徳順一 宮川真由美